

卷頭之辭

陽春五月、草木新綠に萌え立ち、誠に爽快、此上もない。本會も益々隆盛にして會友も千二百を越え、我等が「建設」も號を重ねる事既に二十有四近く五周年を迎へんとす。大慶至極である。

國境建設の計畫も北邊振興計畫と名稱られて愈々具體化し技術の大量採用も好成績を以て完了、優秀なる我等の仲間が大東亞の建設を目差して陸續として走せ參じつゝある。且は又大東港築港計畫も軌道に乗り、土建界の將來は目覺しき極みである。

解氷期も既に過ぎ、道路の建設、海空港の築造、さては水電建設、河川改修工事等々、諸々の大工事は吾等の優秀なる技術を俟つ事切である。この刻に當り我等よく一致團結、上下心を一にして熱意を以て斯業達成に邁進せん事を誓ふものである。

滿洲の氣候風土は祖國日本、或は諸外國とは趣を異にする事は周知の事實であるが、寒氣の征服、大濕地帶の克服こそ吾等在滿技術者に課せられたる大使命であらう。

建設資材入手難の折柄、世を擧げて代用品時代を現出し、特に現地材料利用の研究漸く盛んである。

模倣技術の時代は去つた。吾等技術者はすべからく各種工事に新機軸を案出斯界の範たらん事を望んで止まぬ次第である。之が爲には大土木研究處の早急なる實現こそ目下の急務と信ず。

資材に恵まれたる工事を行ふは易きも現下の如き状勢下に於ては身は宛ら戰場にある如き覺悟を以て一意專心工事に萬全を期すべし。會友よくそれ健康に留意し、困苦に耐へ、己が使命達成に盡力されん事を希ふ。

M. M. 生